

栃木県歴史文化研究会会報

特集 下野の仏さま

歴史だより

大谷の千手観音菩薩立像(第一龕)

北口 英雄

坂東第一九番札所の本尊千手観音菩薩立像(像高三八九cm)は、少し前傾した龕中央の壁面に、大型の宝珠光を背に蓮華座上に直立する。頭体部から四二臂の大半を岩壁から彫り出し、前方に突き出した数臂は前膊半ばや手首から先を別製石材で矧ぎ足し、小脇手は塑土で整形する。

修理は二度行なわれた。一層目は造立当初のもので、ノミ跡の荒い高肉彫の表面に朱と生漆を塗り、青色の塑土を薄く塗り重ねてその上に漆箔を施す。全体に火災の痕もなまなましく、合掌手や宝鉢手の周囲にわずかに塑土を残すが、頭部や面部、裳裾の塑土は剥落して石心部が露出する。また手首や足先、台座の岩質は風化によって欠失した部分がある。

制作年代は、腰から下の岩肌は傷みが激しく、当初からの量感や衣褶表現は分かりにくい。大腿部に衣文を刻まず、股間部に縦一条の襷と両膝から下方にU字形紐状の襷をあらわす形姿は、唐招提寺講堂木彫像に近似した特徴である。しかしおだやかな面貌や左右相称にまとめた端正な体形、誇調のない自然な量感表現など伝統的な天平様式による造作であり、新しい唐招提寺様式の影響を受けた官営造仏所の仏工による奈良時代末期の作である。

磨崖仏には表現のしにくい四二臂をまとめた造形力や、砂層と粘土層のある大谷石の岩壁に石心塑像の技法で作した技量は、塑像と石彫に習熟した仏師によってのみ造作しえた磨崖仏である。岩肌に直接朱を塗ったのは、岩

第 67 号

編集・発行

栃木県歴史文化研究会

事務局

〒320-0865

栃木県宇都宮市睦町2-2

栃木県立博物館内

TEL 028-634-1313

FAX 028-634-1310

郵便振替口座

00300-1-19207

山に含まれた水分が岩肌に滲み出て表面の塑土が剥落すのを防ぐためであり、生漆は岩質硬化のための処置である。塑形に用いた青色の塑土には雲母分が多量に含まれており、水分が蒸発した時の収縮率が少なく、粘土質に吸着する性質がある。また塑像表面が滑らかに見えるなど、良質の塑形材料である。仏工は造形作家としての才能だけでなく、岩質に応じて制作する能力も兼ね備えていた。

律令国家にとって奈良時代から平安時代前期にかけて、東北経営最大の懸念は蝦夷対策である。そのため兵士の徴発や物資の調達など膨大な人的・物的資源が投入された。男体山頂から出土した唐時代の舶載鏡など古式の珍宝類は、大和久震平氏^(注1)によると律令国家の要請による蝦夷地平定を祈願しての奉養品である。大谷磨崖仏の千手観音菩薩立像も、戦勝を祈願しての造作である。

千手観音菩薩立像は石心塑像で制作されたが、朝鮮半島や日本では大谷の磨崖仏以外にこの技法で造作された仏

像は皆無である。アフガニスタンから西域、敦煌莫高窟にかけての岩質は粗雑なため、インドや華北地方の石彫のように精密細緻な仏像を彫るのは困難である。そのためこれらの地域では、大半が塑像で製作された。しかし大仏窟など大きな仏像の場合には石心塑像によって制作された。

「招提寺如宝律師伝」に、鑑真と共に来朝した如宝は奈良時代末期に下野薬師寺の住持であり、「招提寺建立縁起」によると、唐招提寺に現存する薬師・千手・梵天・帝釈天・四天王は如宝が造立したとある。仏工としての才能は不明だが、松本雅明氏^(注2)は唐招提寺木彫群の太くたくましい体軀や、Y字形の衣文形式は西域地方に多く見られる特徴であり、中央アジア出身のソグド人である安如宝の影響を指摘されている。

千手観音菩薩立像は、中央政府の命を受けた官営造仏所の仏工による作だが、礼拝する仏像を彫るには「みそ穴」の多い大谷石は不適當である。しかし中国の伝統的技法である石心塑像によって見事に造作された。如宝の技術面での指導によって可能になったのである。

注 1 大和久震平『古代山岳信仰の研究』一九九〇年 名著出版。

2 松本雅明「弘仁彫刻の起源」『国華』七七八・七一九・七二二号(一九五二年) 国華社。